

日本海新聞 若者定住プロジェクト



ジモトでCHALLENGE



GOODHILL Corporation
グッドヒル株式会社

所在地/鳥取市吉成2丁目
電話/0857(21)5000
設立/1961年10月
事業内容/紳士服および婦人服の製造販売
従業員数/848人



オーダーズーツ新時代

顧客満足を追求

日本中の男性を かっこよく！

働き方の変化などに伴いビジネスマンの服装が多様化する昨今、スーツへのこだわりが集まる。とりわけ、生地や細部のデザインなどを自分好みにカスタマイズできるオーダーズーツは、体にフィットした着心地など既製服にはないプレミアム感が味わえる上、おしゃれを手軽に楽

しむ意味でも大きなメリットがあり、若年層にも浸透しつつある。鳥取市内にITを駆使した世界最先端の縫製工場を持つ大手紳士服メーカー「グッドヒル」(吉岡秀樹社長)。一つ一つの工程に手間を惜しまない技能集団のためまぬ努力と確かな仕事で、とっておきの一着を追求する。

注文服の楽しさを感じて 直営店舗

重要な仕事。社員一人一人がトレンドに敏感になって、アパレルを高く張り巡らせる。スーツ人口の減少がささやられる一方、新たなニーズも生まれる。オーダーズーツで自分らしさにこだわるビジネスマンが増えていることを実感する鳥取店の上野正樹店長。スーツを自分で注文してつくるボタンやポケットの形、裏地の色といった細部のデザインなどに個人のこだわりを反映したスーツを受注する。

時代の感性に響く製品を 管理部門 設計

受注した製品の仕様、納期などの情報を処理し、店舗と工場との調整を担う管理部門の1つで、型紙(パターン)を

グッドヒルの直営店舗は鳥取県内に3店舗あり、リピーターが7割を占める。蓄積されたデジタル履歴を参考にしながら、生地を決めて採寸し、ボタンやポケットの形、裏地の色といった細部のデザインなどに個人のこだわりを反映したスーツを受注する。

重要な仕事。社員一人一人がトレンドに敏感になって、アパレルを高く張り巡らせる。スーツ人口の減少がささやられる一方、新たなニーズも生まれる。オーダーズーツで自分らしさにこだわるビジネスマンが増えていることを実感する鳥取店の上野正樹店長。スーツを自分で注文してつくるボタンやポケットの形、裏地の色といった細部のデザインなどに個人のこだわりを反映したスーツを受注する。

受注した製品の仕様、納期などの情報を処理し、店舗と工場との調整を担う管理部門の1つで、型紙(パターン)を



好みを聞きながら、オーダーズーツの生地、色柄などを提案

制作する。D/A(デザイン・アシスト)センター。設計部が主に新商品開発に取り組み。昨年秋発売の軽量オーダージャケット「アクティブライトジャケット」もその一つ。350gと通常の7割程度の軽量で、ポーチに収納して持ち運べる手軽さがある。若者などこれまでオーダーになじみの薄かった層もターゲットだ。

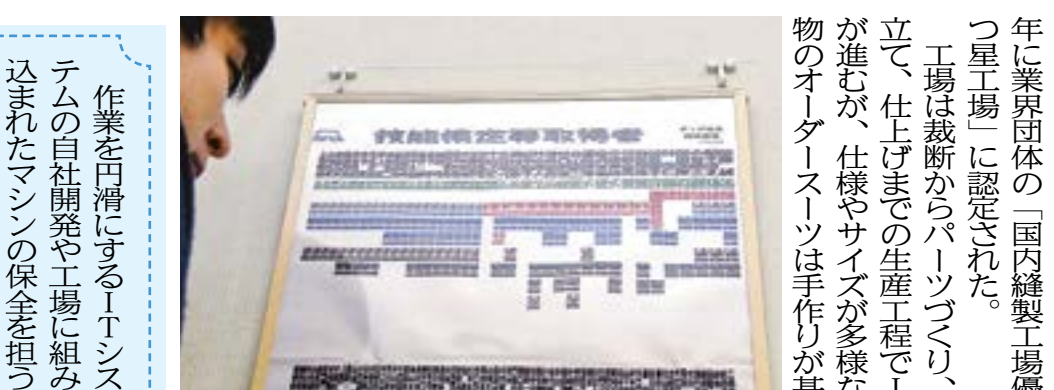
より早く、より美しいものづくり

ハンガーステムなどの最先端ITと匠の技が融合した縫製工場

作業を円滑にするITシステムの自社開発や工場に組み込まれたマシンの保全を担うのは、管理部門の「生産技術センター」。製品在庫を持たない生産システムの優位性をさらに高めるため、最新技術を取り入れたシステム開発を行っている。

大掛かりなハンガーステムなど、メーカーに修理不能と言われたマシンの制御装置などを開発し、復活させる。仮に新調するとしたら必然だった長期間の工場休業を回避しただけでなく、コストも大幅低減できた。制御装置の自社開発によって、そこから取り出したデータを分析し、有効利用が可能になった。

作業を円滑にするITシステムの自社開発や工場に組み込まれたマシンの保全を担うのは、管理部門の「生産技術センター」。製品在庫を持たない生産システムの優位性をさらに高めるため、最新技術を取り入れたシステム開発を行っている。



工場内に掲げられた技能者の社内番付表

「独目の資格試験で技能者」 同社には卓越した技能者「現代の名工」のほか、多くの国認定の紳士服製造技能士らが在籍する。生産部門の社員は自らの縫製技術を高めようと、独自の注文服社内検定にも挑戦。時間内に製図から裁断、縫製を行って一着のスーツを仕上げる実技試験にパスするため、資格を持った熟練社員から直接指導を受け、日々訓練に励む。現在、国や社内の検定試験合格者(特級2級)は約120人に及ぶ。

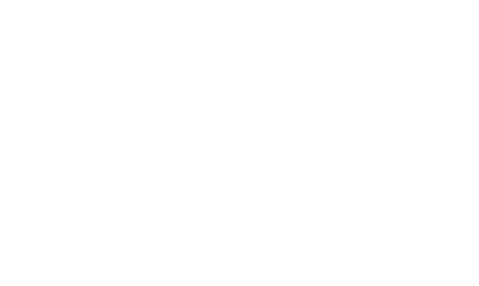
ものづくりは人の手が財産 生産部門

一日900着の紳士オーダーズーツを製造する国内屈指の縫製工場は、工場機能の総合力が評価され、2016年に業界団体の「国内縫製工場優秀三つ星工場」に認定された。

「パートを作る「部品センター」の中川順祐場長は「一人の手でしかできないことがある。高性能なマシンが入っても使うのは人。結局人が財産だ」と力説する。

最先端工場を下支え 管理部門

40分で工場内を一周する 無人自動運搬機



レベーターに乗って走り回り、裁断生地や製品を次の作業現場まで運ぶ無人自動運搬機も開発した。

日進月歩のITを工場の作業にどう生かせるか常に思考を巡らせ、時に作業現場へ足を運ぶ伊藤栄樹部長。「工場内を歩くと、今足りないものは何か、ヒントをもらうこともある」と打ち明ける。現場を知ることが業務改善の近道となる。